

長崎県文化財調査報告書第 128集

# 中 木 場 遺 跡 Ⅱ

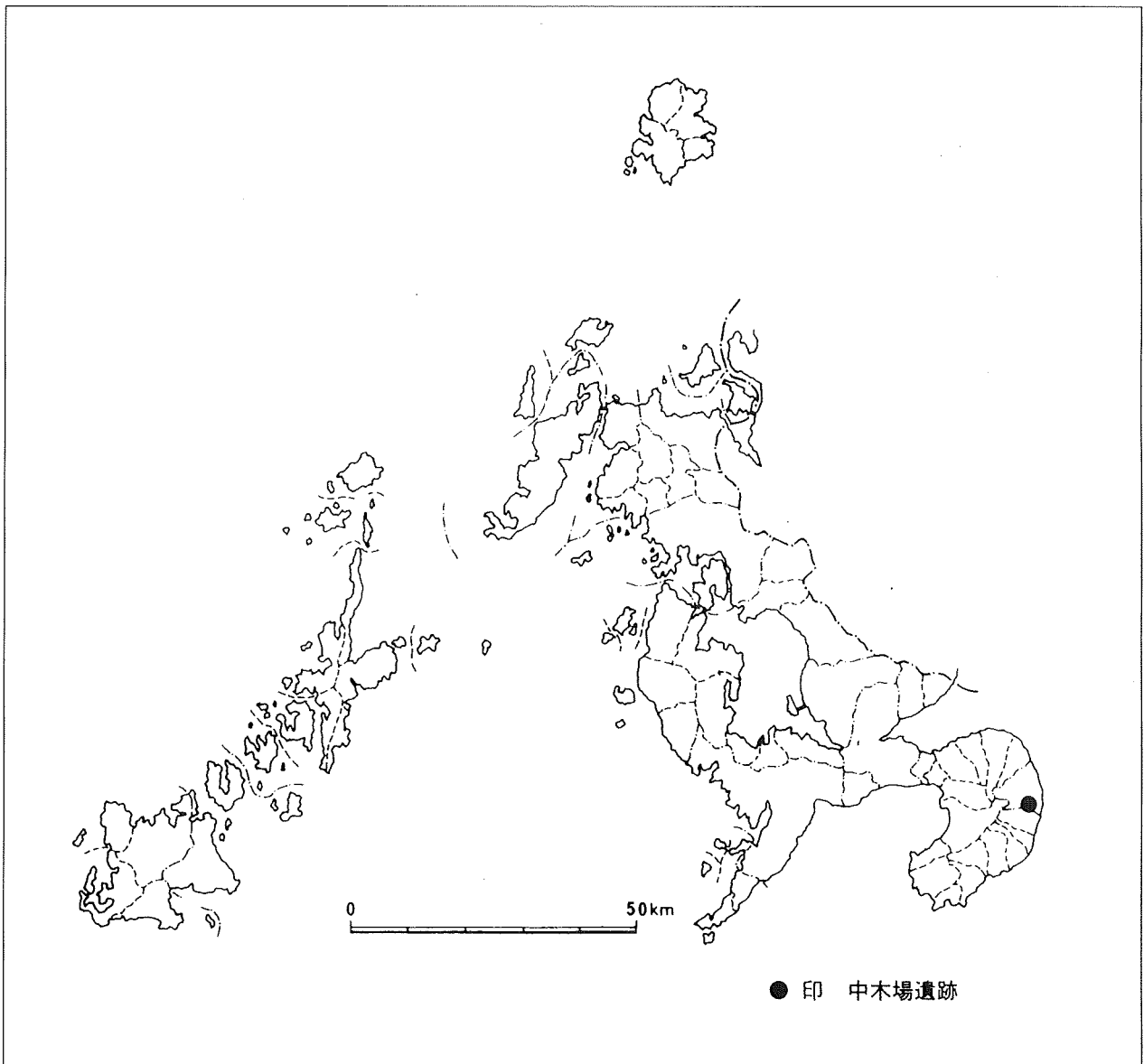
——水無川4号遊砂地造成工事に伴う工事立会調査報告書——

1996

長 崎 県 教 育 委 員 会

# 中木場遺跡Ⅱ

——水無川4号遊砂地造成工事に伴う工事立会調査報告書——



## 発刊にあたって

このたび島原市にある中木場遺跡の2冊目の調査報告書を発刊することになりました。

ご存じのように平成2年11月から始まった雲仙普賢岳の噴火活動は、島原市と深江町に甚大な被害を与えました。そこで、防災対策の一環として水無川流域に1号から4号の遊砂地の造成が計画されました。

今回の調査は、4号遊砂地の造成に伴い実施したものです。調査の結果、調査区の水無川下流部分からは縄文時代晩期の黒色磨研土器、上流部分からは弥生時代から古墳時代にかけての土器などの貴重な遺物を発見することができ、当地が私達の祖先の重要な活動の場であったことを再認識させられました。

この報告書が文化財に対する理解と愛護を深める一助となり、学術研究の資料として役立つことを念じて発刊のあいさつとさせていただきます。

平成8年3月

長崎県教育委員会教育長 中 川 忠

## 例 言

1. 本書は、島原市天神元町・白谷町に所在する中木場遺跡の、水無川4号遊砂地の造成工事に伴う工事立会調査の報告書である。

2. 本調査は、建設省九州地方建設局雲仙復興工事事務所の依頼を受け、県教育庁文化課が担当した。また、調査の際には、島原市教育委員会の協力を受けた。

3. 発掘調査の担当は以下のとおりである。

|           |          |         |
|-----------|----------|---------|
| 長崎県教育庁文化課 | 埋蔵文化財班係長 | 安 楽 勉   |
|           | 〃        | 藤 田 和 裕 |
|           | 文化財保護主事  | 本 田 秀 樹 |
|           | 〃        | 甲斐田 彰   |
| 島原市教育委員会  | 社会教育課主事  | 土 橋 啓 介 |

4. 本書は古門雅高・福田一志・甲斐田彰により分担執筆され、各項の執筆者は本文目次に記した。

5. 本書関係の写真撮影は、調査中のものは本田・甲斐田が担当し、遺物については、土器は古門が、石器は町田・甲斐田・荒木が担当した。

6. 本書関係の出土遺物と図面および写真類は、長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。

7. 『中木場遺跡』長崎県文化財調査報告書第115集においては「第3遊砂地」の名称が用いられているが、本書では本来の名称である「3号遊砂地」を用いるものとする。

8. 本書の編集は甲斐田による。

# 本文目次

|                         |          |
|-------------------------|----------|
| I. 雲仙岳の噴火と調査に至る経緯 ..... | 1 (甲斐田)  |
| II. 立地と環境 .....         | 2        |
| 1. 地理的環境 .....          | 2 (甲斐田)  |
| 2. 島原市の遺跡 .....         | 3 (甲斐田)  |
| III. 調査 .....           | 6        |
| 1. 調査の概要 .....          | 6 (甲斐田)  |
| 2. 土層 .....             | 6 (甲斐田)  |
| IV. 出土遺物 .....          | 8        |
| 1. 縄文土器 .....           | 8 (古門)   |
| 2. 弥生土器 .....           | 8 (古門)   |
| 3. 土師器 .....            | 10 (古門)  |
| 4. 須恵器 .....            | 11 (古門)  |
| 5. 中世陶磁器 .....          | 11 (古門)  |
| 6. 石器 .....             | 13 (福田)  |
| V. まとめ .....            | 16 (甲斐田) |

## 挿 図 目 次

|      |  |    |
|------|--|----|
| 第1図  | 島原市の地形図 (S = 1 / 100,000) .....        | 2  |
| 第2図  | 島原市の遺跡地図 (S = 1 / 50,000) .....        | 4  |
| 第3図  | 中木場遺跡工事区域周辺図 (S = 1 / 4,000) .....     | 5  |
| 第4図  | 中木場遺跡調査 (工事) 区域図 (S = 1 / 4,000) ..... | 6  |
| 第5図  | 土 層 図 (1区 西壁) (S = 1 / 230) .....      | 6  |
| 第6図  | 実 測 図 (小壺と坏) (S = 1 / 15) .....        | 7  |
| 第7図  | 平 面 図 (2区) (S = 1 / 300) .....         | 7  |
| 第8図  | 土器実測図 ① (S = 1 / 3) .....              | 9  |
| 第9図  | 土器実測図 ② (S = 1 / 3) .....              | 11 |
| 第10図 | 石器実測図 ③ (S = 2 / 3) .....              | 14 |
| 第11図 | 石器実測図 ④ (S = 2 / 3) .....              | 15 |

## 表 目 次

|     |                 |   |
|-----|-----------------|---|
| 第1表 | 島原市の遺跡一覧表 ..... | 5 |
|-----|-----------------|---|

## 図版目次

|      |           |    |
|------|-----------|----|
| 図版 1 | 遺跡近景・調査風景 | 19 |
| 図版 2 | 土層状況      | 20 |
| 図版 3 | 遺物出土状況    | 21 |
| 図版 4 | 土器①・②     | 22 |
| 図版 5 | 土器③       | 23 |
| 図版 6 | 石器①・②     | 24 |

# I. 雲仙岳の噴火と調査に至る経緯

雲仙火山で記録に残る特筆すべき火山活動としては、17世紀の寛文及び18世紀の寛政年間に発生した噴火であろう。寛文年間の噴火は、まず寛文3（1663）年旧暦3月普賢岳山頂部の九十九島池で火がみられたのち一旦沈静化した。8カ月後に噴火が再開し幅約100m、長さ約1kmに渡って溶岩が流れた。これが古焼溶岩である。さらに寛文4（1664）年春、九十九島池から出水があり、赤松谷の水無川に沿って安徳川原へ氾濫し、家屋を流出させ死者30人以上を出す惨事を引き起こした。寛政年間の噴火は、寛政4（1792）年2月普賢岳山頂部の地獄跡火口から始まった。活動は活発さを増し琵琶の首から千本木方面へ流れた溶岩は、幅約300m、長さ約2.5kmに達した。4月になると噴火活動は衰えてきたものの地震活動が活発となり5月の激震で眉山が崩壊し、津波を発生させ島原、肥後、天草で死者15,000人にも達した。

それから198年後の平成2（1990）年11月17日、地獄跡火口と九十九島火口から噴火した雲仙岳は一時活動が鎮静化したものの、翌年2月12日に再び噴火活動が活発になった。そして、6月3日に大規模な火砕流が発生した。火砕流は火口から約4km下流の水無川、赤松谷川合流付近まで達し、死者40人、行方不明者3人、負傷者9人を出し、住家49棟と非住家130棟が被害を受ける大惨事となった。その後も、たび重なる火砕流の発生により堆積した火山噴出物は断続的に大規模な土石流となって水無川を襲った。そのため、警戒区域及び避難の勧告により避難する住民の数は最大2,990世帯、11,012人に達した。

こうした被害を緩和するため、水無川流域に1号から4号の遊砂地の建設が計画された。このうち3号及び4号遊砂地は中木場遺跡の範囲に位置し調査の必要が生じた。3号遊砂地の調査については工事主体の島原振興局と県文化課との間で協議が行われ、調査は警戒区域の指定が解除された段階で行う、火砕流に対する避難は万全の体制を準備する、発掘調査が無理な場合は工事立会とする、等で合意され、平成5（1994）年1月25日～1月30日の期間で工事と並行して実施された。その結果は、刻目突帯文土器や黒色磨研土器などの縄文晩期を主体として、弥生・古墳及び中世までの各時代の遺物が出土し、『中木場遺跡』長崎県文化財調査報告第115集に収録された。

4号遊砂地の調査は、県職員と島原半島各市町の専門職員の調査体制を作り、平成5年6月28日より実施する予定であったが、6月26日には国道57号線を越えるほどの大規模な火砕流が発生するなど噴火活動が活発となり建設工事が延期されたため調査も延期となった。その後、噴火活動の鎮静化に伴い、平成7年4月21日建設省九州地方建設局雲仙復興工事事務所長より6月からの建設工事の再開についての工事届が通知された。そこで、雲仙復興工事事務所と県文化課との協議の結果、平成7年7月17日～7月30日の日程で工事立会調査を実施することとなった。

## 〈参考文献〉

- 『雲仙・普賢岳噴火災害の記録』長崎県災害対策本部 1993  
『雲仙岳災害・島原半島復興振興計画』長崎県 1993  
太田一也「雲仙火山」『雲仙の自然と歴史』長崎県 1984



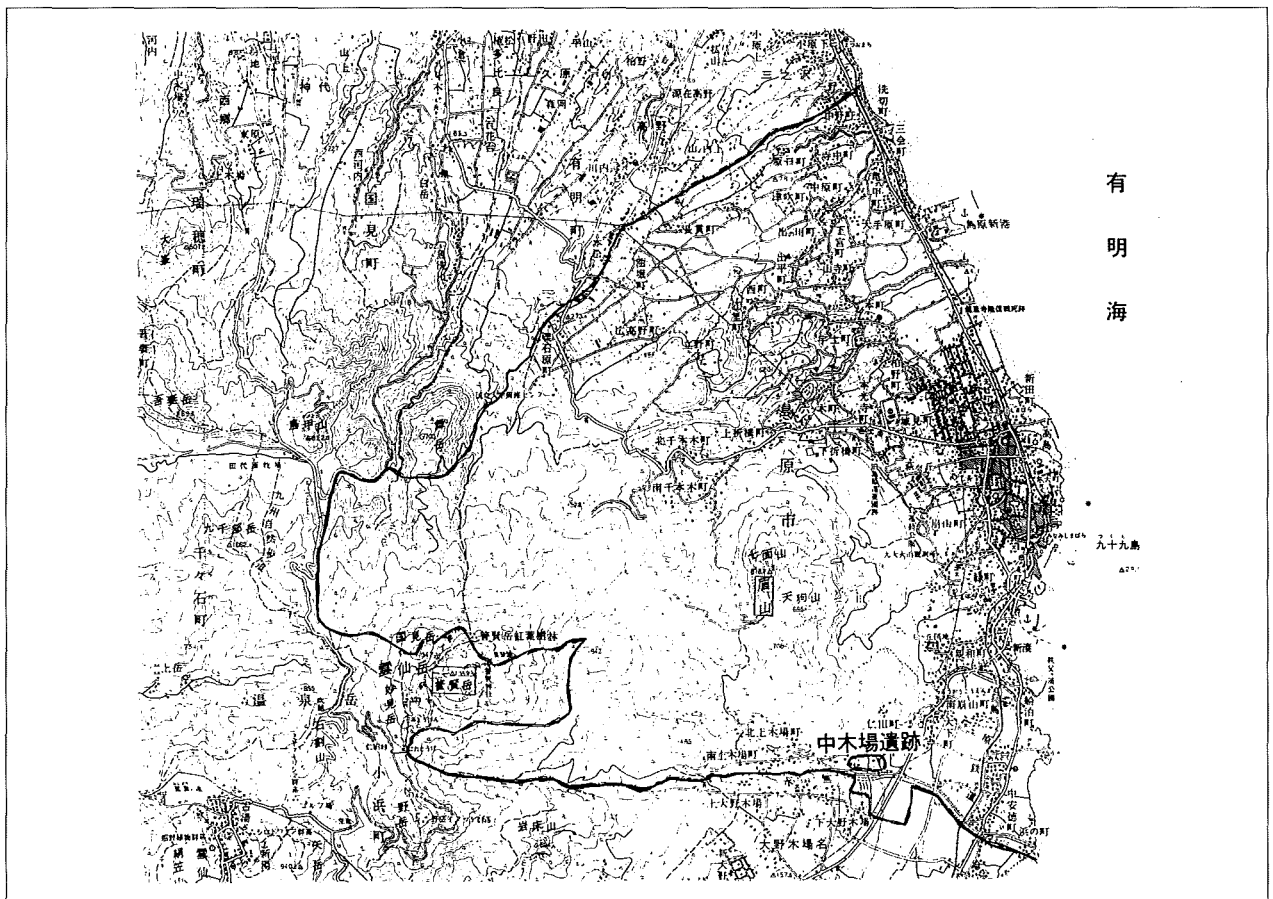
## Ⅱ. 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

長崎県の南東部に位置する島原半島は、有明海と橘湾に囲まれた胃袋状をした半島で、1市16町からなる。面積は458km<sup>2</sup>（H 5.10.1）、人口は167,513人（H 6.10.1）で、ともに県全体の約11%を占める。山岳と海岸美で知られる景勝地で、雲仙岳を中心に国立公園、海岸線一帯は県立公園に指定されている。雲仙岳は雲仙火山群、絹笠火山群、九千部火山群の総称で、中央部には普賢岳をはじめ妙見岳、九千部岳など多数のドーム状溶岩円頂丘が群立して急峻な山岳部を形成している。半島北部と東部では扇状地が良く発達し、西部では鮮明な断層地形が見られる。

遺跡の所在する島原市は、島原半島東部に位置する半島の行政・経済の中心都市で面積は59km<sup>2</sup>（H 5.10.1）、人口は41,314人（H 6.10.1）である。西に雲仙岳を控え、東は有明海に面し、中央部に眉山がそびえる。眉山の北・東・南が緩やかなスロープ状の平坦地となり、田園地帯と市街地が展開している。地下水が豊富でいたる所で湧水がみられる。

中木場遺跡は、島原市の南端に所在し、島原市と深江町の境界を流れる水無川の北側に位置し、北には眉山がそびえ、好天の日には普賢岳が間近に望める場所にある。遺跡の周囲は東下りの緩やかな傾斜を持つ火山性山麓扇状地であり、遺跡の本体はその北端部分に立地し、海岸線からの距離は約2 km、標高は90m～140mを測る。



第1図 島原市の地形図（S = 1 / 100,000）

## 2. 島原市の遺跡

島原半島には、現在446ヶ所の遺跡が周知されており、県内3,510遺跡の12.7%を占める。そのうち、島原市には64ヶ所の遺跡が知られており、内訳は、旧石器時代1、縄文時代26、弥生時代27、古墳時代19、平安時代3、中世8、近世10である。

島原市の遺跡の分布状況を見ると、まず市北部に集中していることが分かる（第2図）。時代は、縄文時代～古墳時代のものが圧倒的に多い。ただし標高200～400mの範囲は、礫石原遺跡(7)、弓弦遺跡(27)、立野遺跡(28)、平の山A遺跡(35)、肥賀太郎遺跡(36)、平の山B遺跡(37)、矢櫃遺跡(52)、馬渡遺跡(64)という縄文時代単独の遺跡で、縄文時代以外の遺跡は礫石原古墓のみである。そして標高200m以下の区域になると原口A遺跡(4)、上油堀遺跡(6)といった縄文時代の遺跡、寺中A遺跡(11)、畑中遺跡(17)といった弥生時代の遺跡、鬼の家古墳(20)、人塚古墳(21)といった古墳時代の遺跡、長貫B遺跡(10)、津吹遺跡(19)といった縄文時代と弥生時代の複合遺跡、原口B遺跡(3)、寺中B遺跡(12)といった弥生時代と古墳時代の複合遺跡が所在するようになる。「遺跡立地の趨勢が時代を経るごとに低地へ向う」<sup>(註1)</sup>という島原半島全体の傾向がみごとにあてはまる。

市中心部には、平安時代以降、特に近世の遺跡が多い。特徴としては、まだれいな銘キリシタン碑(30)、崇台寺のキリシタン墓碑(49)といったキリシタン関係の遺跡と、森岳城跡(46)、旧島原藩薬園跡(51)といった近世領主によってつくられたものがある。

その南部は遺跡の空白地帯である。これは1792年の眉山崩壊によりそれ以前の遺跡がおおわれてしまい、その後もしばらくは人々の生活が困難であったためであることは明らかである。

市南端部には、山麓部分に中木場遺跡(58)、南上木場遺跡(59)、海岸部分には中南遺跡(57)といった縄文時代を含む複合遺跡が所在し、市北部と似た傾向がみられる。

なお、島原市では標高400m以上の区域の遺跡は知られていない。これは山腹と山麓の境が標高200m～400mに存在するため、400m以上は傾斜が急な山地となっているためであると考えられる。

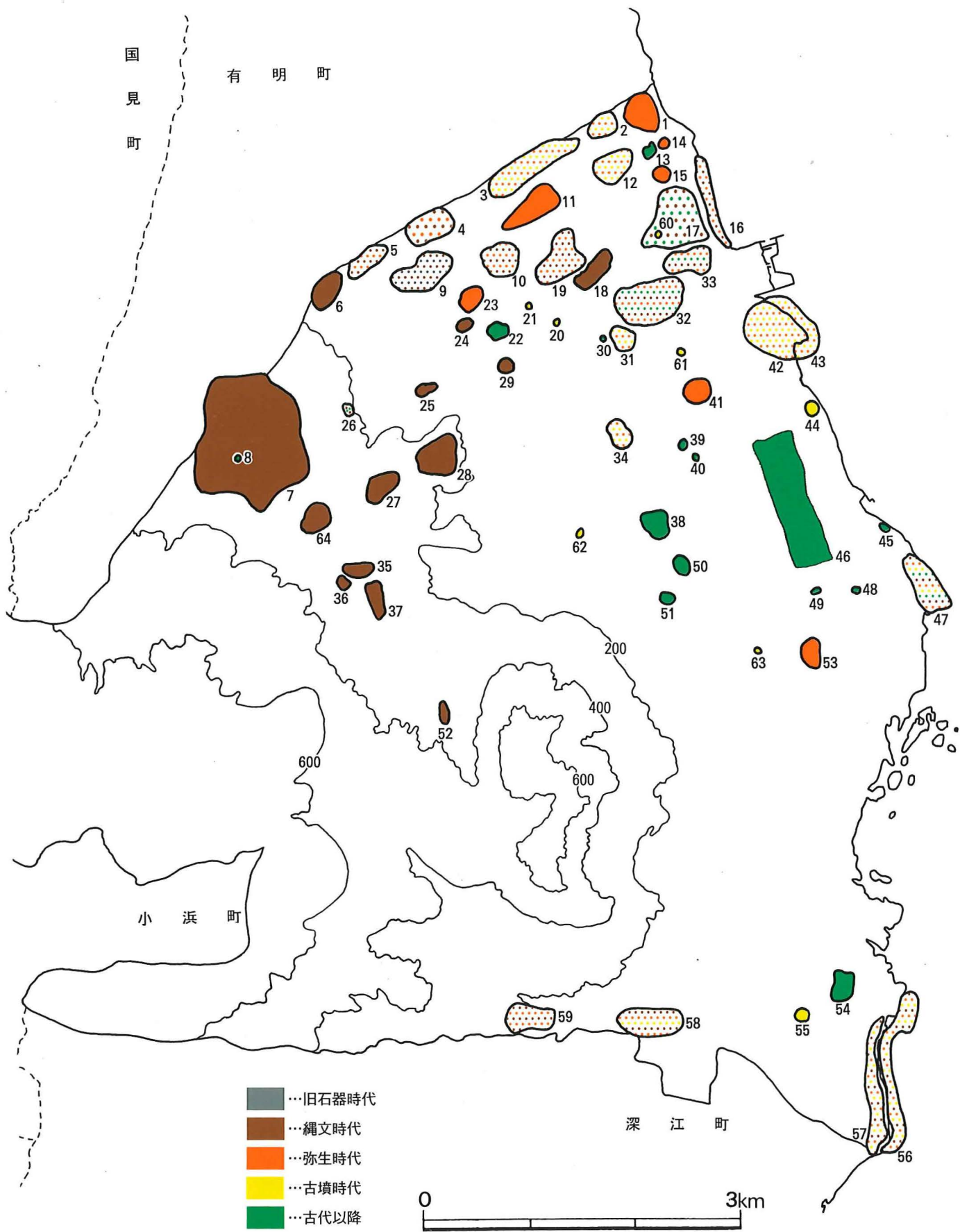
全体的にみると市の中央部に近世の遺跡が所在し、その南に遺跡の空白地帯があり、市の北部と南端部は標高の高い方から縄文時代～古墳時代の遺跡が分布しているということがいえる。

### 〔註〕

註1. 久原卷二「地理的歴史的環境」『国道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』P17～23  
長崎県文化財調査報告書第116集 長崎県教育委員会 1994

### 〈参考文献〉

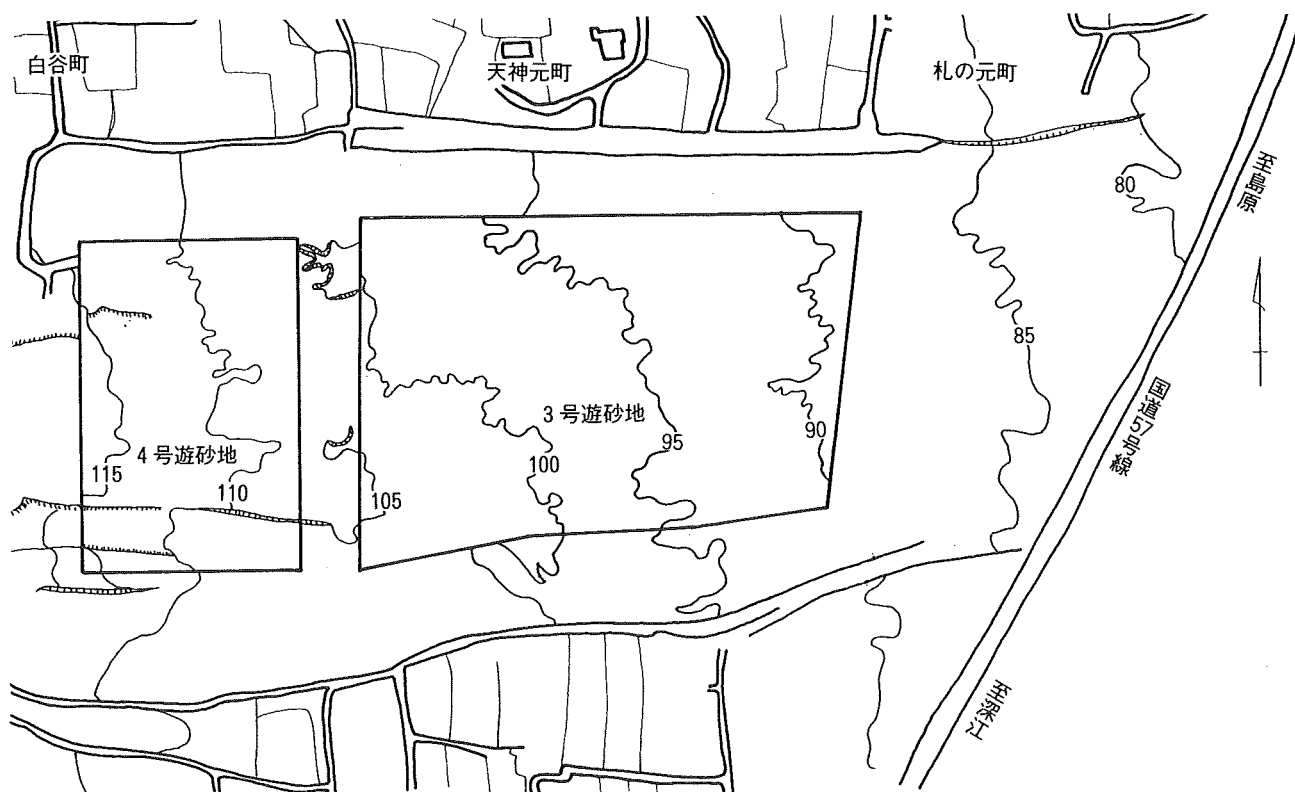
『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第111集 長崎県教育委員会 1994  
副島和明・町田利幸編『礫山原遺跡』長崎県文化財調査報告書第100集 長崎県教育委員会 1991  
町田利幸・浦田和彦編『礫山原遺跡』島原市文化財調査報告書第4集 島原市教育委員会 1988  
村川逸朗編『畑中遺跡』島原市文化財調査報告書第9集 島原市教育委員会 1994  
馬場宣房「島原市」『長崎県百科事典』長崎新聞社 1984



第2図 島原市の遺跡地図 (S = 1/50,000)

| 番号 | 名 称             | 時 代     | 番号 | 名 称               | 時 代   |
|----|-----------------|---------|----|-------------------|-------|
| 1  | 景 華 園 遺 跡       | 弥 生     | 33 | 下 宮 遺 跡           | 繩・弥・近 |
| 2  | 上 中 野 遺 跡       | 弥・古     | 34 | 釘 原 遺 跡           | 弥・古   |
| 3  | 原 口 B 遺 跡       | 弥・古     | 35 | 平 の 山 A 遺 跡       | 繩 文   |
| 4  | 原 口 A 遺 跡       | 繩・弥     | 36 | 肥 賀 太 郎 遺 跡       | 繩 文   |
| 5  | 下 油 堀 遺 跡       | 繩・弥     | 37 | 平 の 山 B 遺 跡       | 繩 文   |
| 6  | 上 油 堀 遺 跡       | 繩 文     | 38 | 丸 尾 城 遺 跡         | 中 世   |
| 7  | 礫 石 原 遺 跡       | 繩 文     | 39 | 熊 野 神 社 遺 跡       | 平・中   |
| 8  | 礫 石 原 古 墓       | 平 安     | 40 | 熊 野 神 社 窯 跡       | 近 世   |
| 9  | 長 貫 A 遺 跡       | 先・繩     | 41 | 道 田 遺 跡           | 弥 生   |
| 10 | 長 貫 B 遺 跡       | 繩・弥     | 42 | 沖 田 遺 跡           | 弥・古   |
| 11 | 寺 中 A 遺 跡       | 弥 生     | 43 | 沖 田 海 中 遺 跡       | 弥・古   |
| 12 | 寺 中 B 遺 跡       | 弥・古     | 44 | 沖 田 暖 遺 跡         | 古 墳   |
| 13 | 中 野 川 遺 跡       | 中 世     | 45 | 長 浜 台 場 遺 跡       | 近 世   |
| 14 | 中 野 川 遺 跡       | 弥 生     | 46 | 森 岳 城 遺 跡         | 近 世   |
| 15 | 西 川 遺 跡         | 弥 生     | 47 | 大 手 浜 遺 跡         | 繩~近   |
| 16 | 三 会 下 町 海 中 遺 跡 | 繩・弥     | 48 | 浜 の 城 遺 跡         | 近 世   |
| 17 | 畑 中 遺 跡         | 繩 文・中 世 | 49 | 崇 台 寺 の キリシタン 墓 碑 | 近 世   |
| 18 | 三 会 中 学 校 遺 跡   | 繩 文     | 50 | 小 山 社 館 遺 跡       | 中 世   |
| 19 | 津 吹 遺 跡         | 繩・弥     | 51 | 旧 島 原 藩 薬 園 遺 跡   | 近 世   |
| 20 | 鬼 の 家 遺 跡       | 古 墳     | 52 | 矢 櫃 遺 跡           | 繩 文   |
| 21 | 人 塚 遺 跡         | 古 墳     | 53 | 上 の 原 遺 跡         | 弥 生   |
| 22 | 大 塚 下 遺 跡       | 中 世     | 54 | 安 徳 城 遺 跡         | 中 世   |
| 23 | 南 楠 沢 遺 跡       | 弥 生     | 55 | 上 馬 場 棺 遺 跡       | 古 墳   |
| 24 | 大 塚 後 遺 跡       | 繩 文     | 56 | 中 南 海 中 遺 跡       | 古 墳~  |
| 25 | 尻 無 遺 跡         | 繩 文     | 57 | 中 南 遺 跡           | 繩~古   |
| 26 | 大 タ プ 沢 遺 跡     | 繩・中     | 58 | 中 木 場 遺 跡         | 繩~古   |
| 27 | 弓 弦 遺 跡         | 繩 文     | 59 | 南 上 木 場 遺 跡       | 繩・弥   |
| 28 | 立 野 遺 跡         | 繩 文     | 60 | 大 塚 古 墳           | 古 墳   |
| 29 | 坪 浦 遺 跡         | 繩 文     | 61 | 長 塚 古 墳           | 古 墳   |
| 30 | まだれいな銘キリシタン碑    | 近 世     | 62 | 小 塚 古 墳           | 古 墳   |
| 31 | 山 崎 遺 跡         | 弥・古     | 63 | 笹 塚 古 墳           | 古 墳   |
| 32 | 稗 田 原 遺 跡       | 繩・弥・近   | 64 | 馬 渡 遺 跡           | 繩 文   |

表 1 島原市の遺跡一覧

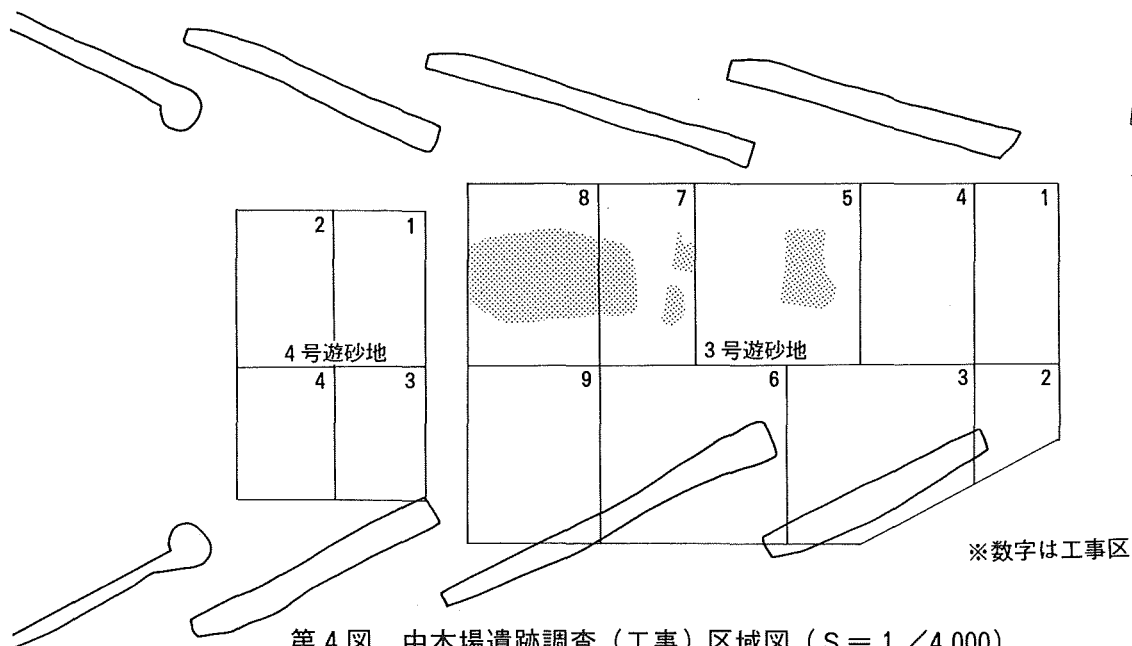


第 3 図 中木場遺跡工事区域周辺図 (S = 1 / 4,000)

### Ⅲ. 調 査

#### 1. 調査の概要

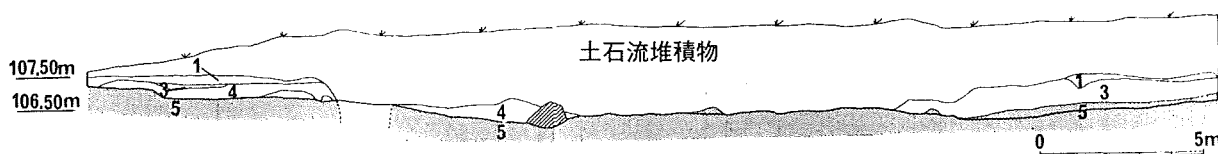
調査は、平成7年7月17日～7月28日の期間で行われた。調査区は遺跡にかかる水無川の北側部分とし、工事区の設定名称である「その1」を調査区の1区、「その2」を調査区の2区とし、2区の南側をA、北側をBとした(第7図)。ここは、3号遊砂地の調査で遺物が採取できた地域の水無川上流部分にあたる(第4図)。各区とも土石流が2～3mほど堆積しており、調査期日も限られていることから工事に並行して重機で包含層まで掘り下げ、遺物を取り上げる方法を取った。遺物はおもに、1区から縄文時代晩期の土器が、2区からは弥生時代～古墳時代の土器が出土した。また2区からは、石に囲まれた弥生時代の小壺と坏が重なった状態で確認された(第5図・図版3)。



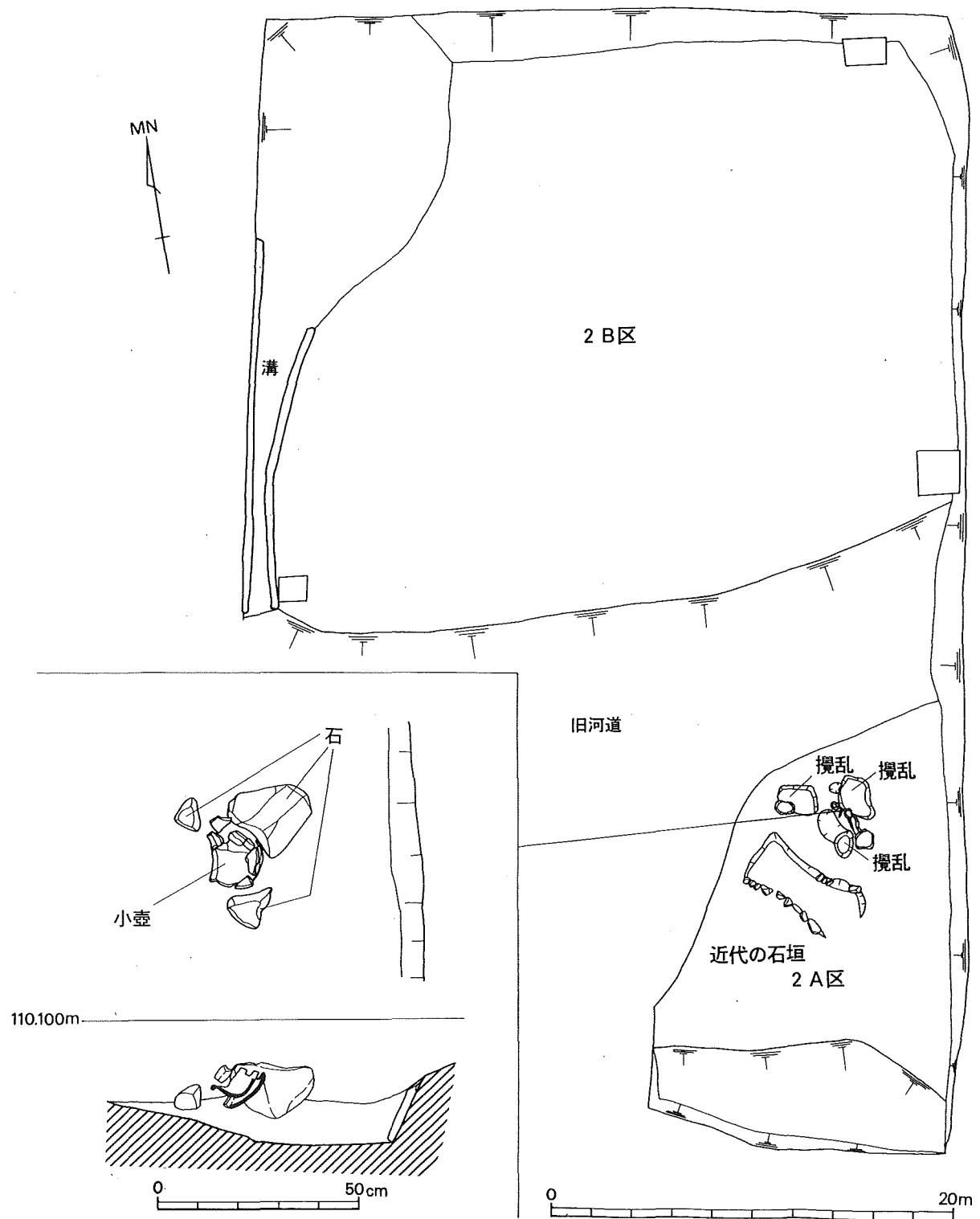
第4図 中木場遺跡調査(工事)区域図 (S=1/4,000)

#### 2. 土 層 (図版2)

土石流堆積物下の土層は基本的に5層に大別できた。これは、3号遊砂地の土層と対応する。第1層は暗褐色土の表土層で畑土として利用されていた。第2層は茶褐色土で火山灰質の層で2区でみられた。第3層は黒色土でフカフカした火山灰質の層である。1区の北側と2区で50cm～60cm、1区の南側で約10cmの厚さがあった。弥生時代から古代の包含層である。第4層は黄褐色土でフカフカした火山灰質の層である。1区の南側でみられ厚さは約40cmであった。縄文時代の遺物が出土した層である。第5層は灰色の混礫砂層で基盤層である。



第5図 土層図(1区西壁) (S=1/230)



第6図 実測図 (小壺と坏) (S = 1 / 15)

第7図 平面図 (2区) (S = 1 / 300)

## IV. 出土遺物

### 1. 縄文土器（第8図・図版4）

1は深鉢形土器の口縁部である。「く」字形に外反する口縁部に文様帯をもつもので、表採である。文様は粗い条痕によるものである。2も同様に「く」字形口縁に文様帯をもつ深鉢形土器の口縁部で、文様帯には7条以上の沈線が施されている。3, 4は玉縁状の口縁をもつ浅鉢形土器である。3は口縁部の立ち上がり部分の外面に沈線や段がなく、この形式の浅鉢としては後出するものであろう。これらの資料は黒川式（礫石原式）の範疇にはいるものであるが（註1）、3は黒川式（礫石原式）でも新しい時期の資料と考えられる。

### 2. 弥生土器（第8図・図版4）

#### (1) 壺形土器（6）

頸部から肩部にかけての広口の壺形土器片である。内外面は淡黄褐色で砂粒を多く含む。頸部と胴部の境には断面三角形の貼付突帯を有する。肩部外面はヨコナデ、頸部外面はタテハケ、頸部内面上部はヨコハケで調整している。後期の資料である。

#### (2) 甕形土器（7・8）

7・8ともに口縁部が「く」字形に屈折し若干内湾しながら開く台付甕と思われる。内外黄橙色で胎土に若干の砂粒を含む。胴部の張りは弱く、胴部最大径は胴中央部にくるものと考えられ、後期後半の時期と思われる（註2）。いずれも磨滅が著しく調整痕は不明である。

#### (3) 高杯形土器（5・9～11・13）

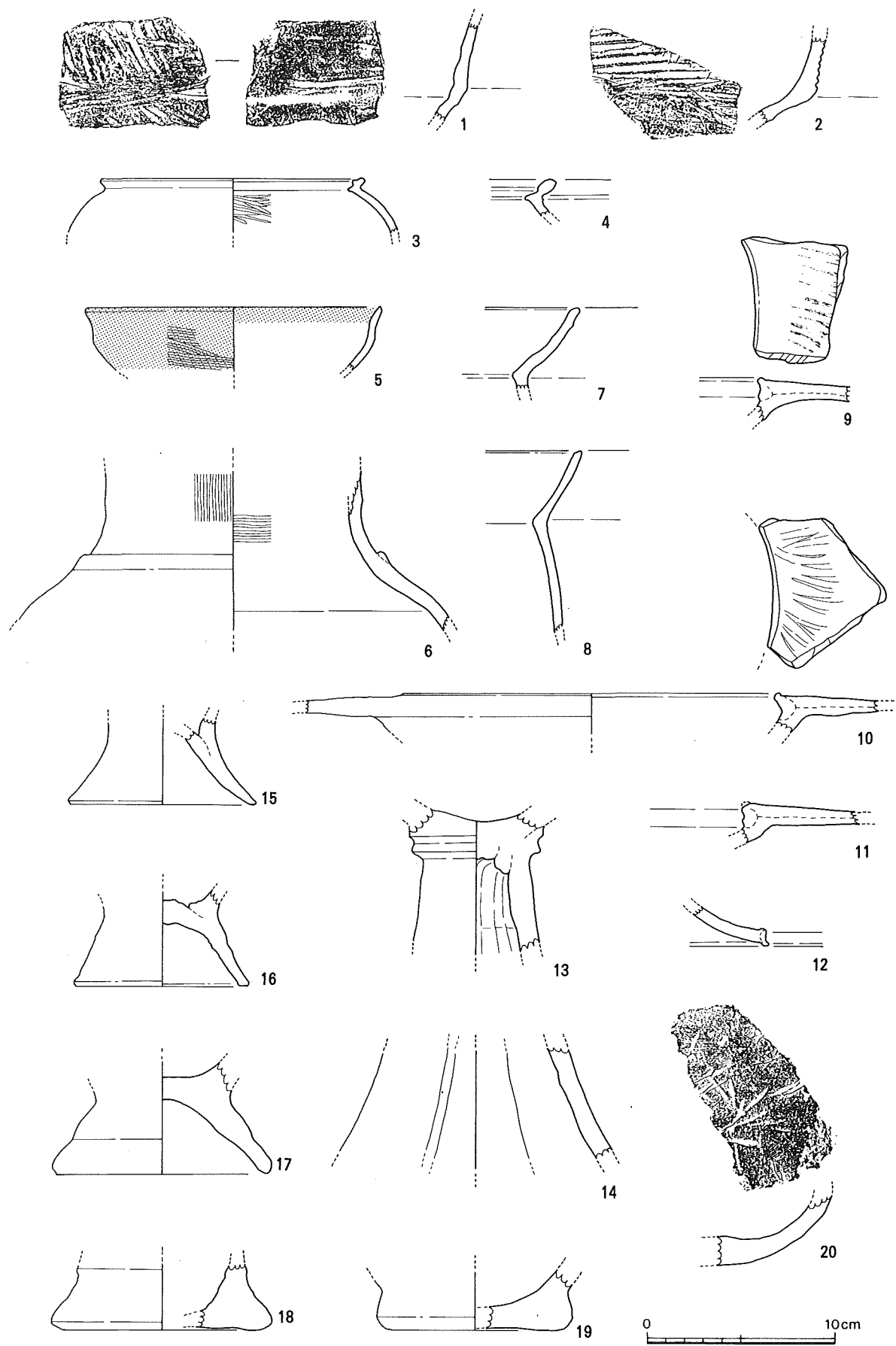
5は坏部の破片である。表面はハケ目が残り、外面丹塗である。内面は明黄褐色で、口唇部に丹が残る。9～11は鋤先状の口縁部をもつものである。いずれも黄橙色を呈し、精選された胎土を使用している。坏部上端は低い突帯が付され、水平にのびる口縁部には暗文が施されている。類例としては南高来郡口之津町三軒屋貝塚出土の高杯A類がある（松藤1975）。三軒屋貝塚の弥生土器の大半は後期後半から終末の時期とされている。13は坏部と脚部の境に突帯をもつ資料である。胎土・色調は高杯に似る。脚部外面はタテハケの後、磨いている。突帯は断面がM字形をしており、脚内面にはシボリ痕がのこる。突帯を有する高杯は北部九州などの弥生前期にみられるが、時期的に異なる。島原半島の対岸である肥後地方の中期・後期土器のなかに系譜をもとめるべきであろうか。

#### (4) 器台（12・14）

14は台形の透孔をもつ器台の脚部と思われる。胎土色調は前述の高杯に似る。透部分の上下端を欠失しているため、全体の器形は不明である。12は器台の脚の裾部である。内外面は明黄褐色で胎土は精選されており、表面は丁寧にナデられている。

#### (5) 台付甕底部（15～17）

脚高としては高いものである。いずれも明黄褐色で砂粒を含む。15は磨滅が著しく調整は不明である。16は脚内面にヨコナデをおこない、胎土も精選されている。



第8图 土器实测图① (S=1/3)



#### (6) 底部 (18~19)

いずれも明黄褐色をなす。18は砂粒・角閃石・雲母を多くふくみ、粗製である。19は若干の砂粒を含み、全体はナデによって仕上げられている。

#### (7) その他 (20)

鉢形土器などの底部付近であろうか。黄橙色を呈し、角閃石や雲母を含む。内面に放射状のハケ目がみられる。

中木場4号遊砂地より出土した弥生土器は後期を中心とした資料で、後期後半の時期が中心となるようである。先般報告された中木場3号遊砂地7区3層出土の弥生土器も前期の資料を含むものの、主体は後期後半であった(本田1994)。その際指摘されていた「中期中葉前後の資料の欠落」を今回の調査でも補うことができなかった。「何らかの原因で遺跡が継続できなかった」という可能性を再度示唆する結果となった。

### 3. 土 師 器 (第9図・図版5)

#### (1) 甕形土器 (21~26)

21, 22は口縁部が若干波うちながら、外反するものである。21は在地系の台付甕で、21は外面黒褐色で、タテハケが残る。内面は茶褐色で、肩部内面はハケで調整されている。口唇部はナデによって平坦に仕上げられているため、外方に肥厚し、頂部に窪みが生じている。22は外面黒褐色、内面灰色である。口唇部はナデによって平坦に仕上げられている。肩部内面はヘラケズリによって成形されており、その他はナデ調整である。21・22ともに布留式の影響は残しているが、口唇部が平坦化しており布留式の新しい段階である。23は口縁部が外反し、口唇部は丸くおさめる資料である。内外面は黄褐色で砂粒・角閃石・雲母を含む。肩部内面はヘラケズリが施されている。24は内外暗茶褐色で口唇部が丸くおさめられるものである。内面はヘラケズリである。25は外反する口縁部で、外面黒褐色、内面黄褐色でヘラケズリをおこなっている。26は「く」字形口縁で、肩部内面に斜めのハケを施す。内外面暗茶褐色である。23・24などの資料は大村市大堂遺跡出土土器に類似する(宮崎1979)。

#### (2) 杯形土器 (27~29)

27・28は口縁部が内湾しながら立ち上がるものである。27は外面茶褐色、内面黒褐色で若干の砂粒を含む。内外面はナデによって調整されているが、外面にはハケの痕跡を残す。28は精選された胎土で赤褐色を呈する。丁寧に成形されており外面にケズリの痕跡がある。29は精選された胎土で赤褐色を呈するものである。内外面はヘラミガキが施されている。27・28の資料は大村市大堂遺跡出土杯形土器I類と同型式といえる。

#### (3) 短頸小形丸底壺 (30)

外反する短い口頸部をもつ。底部を欠失するが丸底になるものと思われる。胎土や色調は27に似ており、同時期のものとする。内面ヘラケズリの後、内外面をナデで仕上げている。

本遺跡の土師器については少なくとも二型式あり、ひとつは布留式の新しい段階、ひとつは大村市大堂遺跡出土の新相段階にほぼ併行する土器群である(註3)。

#### 4. 須恵器 (31)

提瓶か長頸壺などの口縁部である。内外灰色で口唇部が上方につまみ上げるように作出されている。

#### 5. 中世陶磁器 (第9図・図版5)

##### (1) 須恵器 (33・34)

33は表面に格子の叩きを有したものである。熊本県荒尾市樺万丈窯の製品の可能性がある。34は外より内に向かって穿孔されている資料である。鉄分が付着し鍛冶関係の容器の可能性もある。器形は不明である。

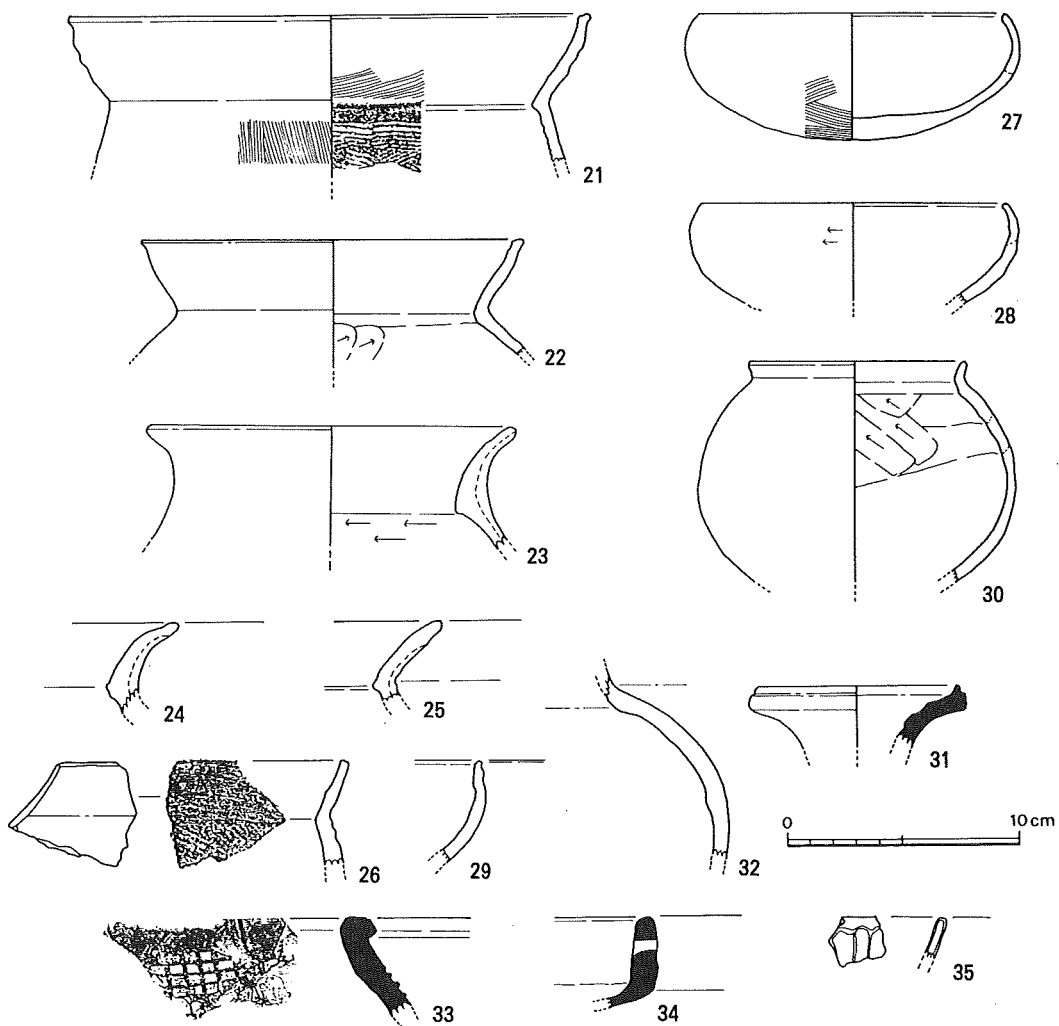
##### (2) 陶器 (32)

備前焼の頸部から胴部にかけての資料である。

##### (3) 輸入陶磁器 (35)

鎬蓮弁の椀の口縁部である。

以上の土器の出土地区および出土層位は、18・24・33・34は1区第1層、2・5・27・30は2A区第2層、その他は2B区第3層出土である。



第9図 土器実測図② (S = 1 / 3)

[註]

- 註1 島原半島における縄文晩期前半の土器変遷については有明町中田遺跡出土土器（晩期初頭）→島原市畑中遺跡出土土器（晩期前葉）→島原市礫石原遺跡出土土器（晩期中葉）という変遷を考えている（古門・寺田1995）。礫石原遺跡出土土器については黒川式段階の土器で、礫石原遺跡から出土するものという限定つきで使用している。
- 註2 隣接する熊本県西部地方における近年の弥生後期の台付甕の編年によれば、後期前葉は胴部の最大径が胴部中央より上位にくるが、後期中葉以降は胴部中央に移ることが指摘されている（高木1979・高谷1987・西住1992）。この傾向は島原半島およびその周辺地域でも看取できる（宮崎1985・宮崎1986）。
- 註3 長崎県における古式土師器の変遷は、1980年代の前半に宮崎貴夫や秀島貞康が変遷を論じて（宮崎1982・秀島1981）以降進展していない。畿内系土器の搬入が少ないことや古式土師器の良好な一括資料に乏しいことが原因である。布留式直後の段階については 南高来郡国見町上篠原遺跡で陶質土器と共伴する土師器が出土し報告されている（諫見・内山1988）。

<引用・参考文献>

- 諫見富士郎・内山泰紀 1988『上篠原遺跡』長崎県立国見高等学校考古学研究部
- 高木正文 1979「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化談叢』第6集 古文化研究会
- 高谷和生 1987「下山西遺跡出土土器の編年（案）について」『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集 熊本県教育委員会
- 西住欣一郎 1992「まとめ」『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第121集 熊本県教育委員会
- 秀島貞康 1981「まとめ」『平山遺跡B地点－みはる台小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』諫早市文化財調査報告書 第3集 諫早市教育委員会
- 古門雅高・寺田正剛 1995「総括」『国崎遺跡Ⅱ』南串山町文化財調査報告書第3集 南串山町教育委員会
- 本田秀樹 1994「弥生土器」『中木場遺跡－水無川第3遊砂地造成工事に伴う発掘調査』長崎県文化財調査報告書第115集 長崎県教育委員会
- 松藤和人 1975「弥生式土器」『口之津貝塚（旧称三軒屋貝塚）及び口之津烽火（のろし）遺跡調査報告－有明海周縁の弥生文化後期の様相』百人委員会埋蔵文化財報告第5集 百人委員会
- 宮崎貴夫 1979「大堂遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第45集 長崎県教育委員会
- 宮崎貴夫 1985「西ノ角遺跡出土の土器について」『西ノ角遺跡』長崎県文化財調査報告書第73集 長崎県教育委員会
- 宮崎貴夫 1986「弥生土器および古式土師器について」『今福遺跡Ⅱ』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会

## 6. 石 器 (第10図・第11図・図版6)

### (1) 剥片石器 (1～6, 9)

スクレイパー類を主体とする一群の石器が出土している。1は、玄武岩を利用した周辺加工の石器である。素材との関係で、一見尖頭状になっているが、裏面における先端部の加工が弱く、側辺部・下端部に加工が集中していることから、ラウンド、あるいはエンドスクレイパーと考えられる。器体中央部には、剥離の際に剥離できなかった部分が、瘤状に残っており、本来は現状よりも薄みのものに加工するべく意図したものであろう。2は、横広の剥片を使用し、下端部に残った自然面の一部に加工をしている。素材は、平坦打面で、横広のものを使用しており、下部に自然面を残した晩期に特有のものである。西彼町のケイマンゴ遺跡などでは、晩期剥片のあり方として、自然面打面および平坦打面が多様されていること、剥片の下端部、及び側辺に自然面を有することなどが晩期の剥片の特徴として挙げられている。2の剥片についても同様な特徴を示していると言えよう。3は、良質の安山岩を使用した横型の石匙で、器体に対して刃部が長く、特に刃部の調整は丁寧な作りをしている。4～6・9は安山岩を素材とするスクレイパー類である。4は板状の剥片の両側辺に刃部を作り出しており、左右の加工の刃部加工は、逆に施されている。これに対し、5・6は、分厚い剥片を素材としており、その一部に刃部を形成した、エンドスクレイパーである。分厚い素材剥片の一部にのみ、加工を加える点で、2点は共通しており、刃部も鈍角であるため硬質のものを加工するためのものであろう。9は素材の原礫を、シャッポ状に剥離した剥片を利用したもので、剥片の一端に軽くノッチ状の加工を加えて刃部としている。この剥片そのものは、石核の調整をする際に剥離されたものを使用したものと思われる。

### (2) 石 核 (7・8)

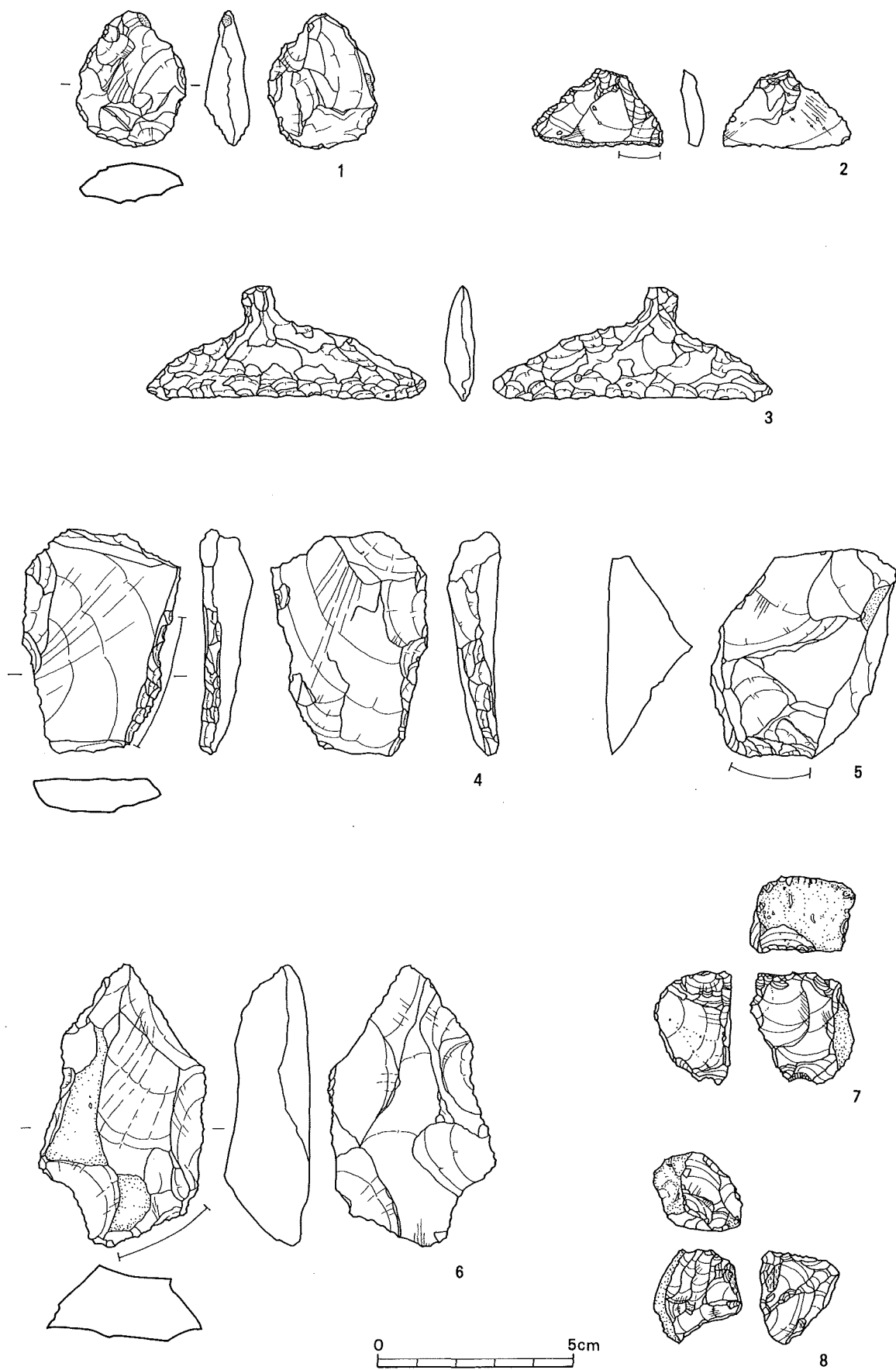
『中木場遺跡Ⅲ』の中でも、小型の石核が出土しており、この2点も出土土器等から考えて晩期の所産の石核と捉えられるものであろう。7は自然打面に、調整を加えながら剥片剥離を行っているもので、8は、剥離面を転用して打面としたものである。特に8などは、目的剥片とはいかないような細かな剥片を剥離しており、これも晩期の石核に見られる特徴を具備している。

### (3) 磨 石 (10)

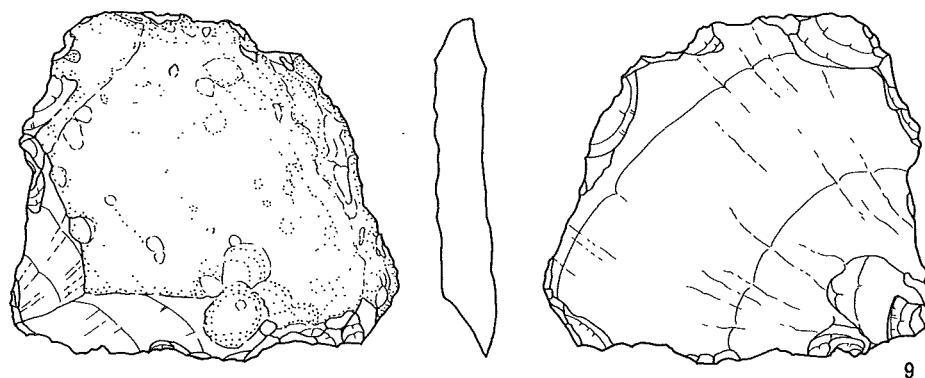
硬質の砂岩を利用している。両面共にすり減っており、一部トロトロになった面もある。台石としても転用したものか、中央部にリタッチが見られる。

#### 〈参考文献〉

横山巴貴子 『ケイマンゴ遺跡』 長崎県文化財調査報告書 第52集 長崎県教育委員会 1980



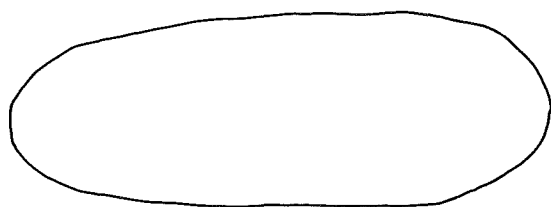
第10图 石器实测图① (S = 2 / 3)



9



10



第11図 石器実測図② (S=2/3)

## V. ま と め

今回の調査の結果を簡単にまとめると以下のとおりである。

1. 出土した遺物からみて、本遺跡は縄文時代晩期から中世に至る複合遺跡であるということがいえる。
2. 黒川式（礫石原式）の縄文土器が出土していることから、島原半島の北東部に多数所在する縄文晩期の遺跡群と同じように、礫石原遺跡の影響下にあった。<sup>(註1)</sup>
3. 弥生土器は、後期後半の時期が中心となり、3号遊砂地の調査の時と同じく「中期中葉前後が欠落」<sup>(註2)</sup> していた。
4. 出土遺物が「量的に少ないことから、中心地は違う地点に位置している」<sup>(註3)</sup> と考えられた3号遊砂地の調査のときより、さらに出土遺物は少なかったため、この地点も遺跡の中心とは考えられない。
5. 水無川下流の1区からは、図示できなかったが縄文土器片が多く出土し、弥生土器片はわずかであった。上流の2区からは、弥生土器片が多く出土し、縄文土器片が少なかった。このことから、中木場遺跡内の狭い範囲で「時代を経るごとに低地へ向かう」<sup>(註4)</sup> という島原半島の傾向と逆の動きがあった可能性がある。
6. 遺構としては、石に囲まれた小壺と坏が重なった状態で確認されたが、性格は不明である。

今回の調査は、造成工事と並行して行われ、かつ避難用車両を待機させ、毎週月曜日には避難訓練を行うという厳しい環境のもとで実施されたが、中木場遺跡の性格を明らかにする上で貴重な資料を得ることができた。

現在普賢岳は噴火活動も収まり、水無川流域は緑地公園化の計画が着実に実現しつつある。この地で火山と共に生きた古の先達たちに敬意を表しつつ、今後もこの地が火山と共に発展していくことを念願して本章を閉じたいと思う。

### 〔註〕

- 註1. 宮崎貴夫・伴耕一朗「I 肥賀太郎遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報XIII』 P 1～4  
長崎県文化財調査報告書第97集 長崎県教育委員会 1990
2. 本田秀樹「弥生土器」『中木場遺跡』 P 26  
長崎県文化財調査報告書第 115集 長崎県教育委員会 1994
3. 安楽 勉「まとめ」『中木場遺跡』 P 30  
長崎県文化財調査報告書第 115集 長崎県教育委員会 1994
4. 久原卷二「地理的歴史的環境」『国道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 P 17～23  
長崎県文化財調査報告書第 116集 長崎県教育委員会 1994

# 圖 版



遺跡近景（北側から）

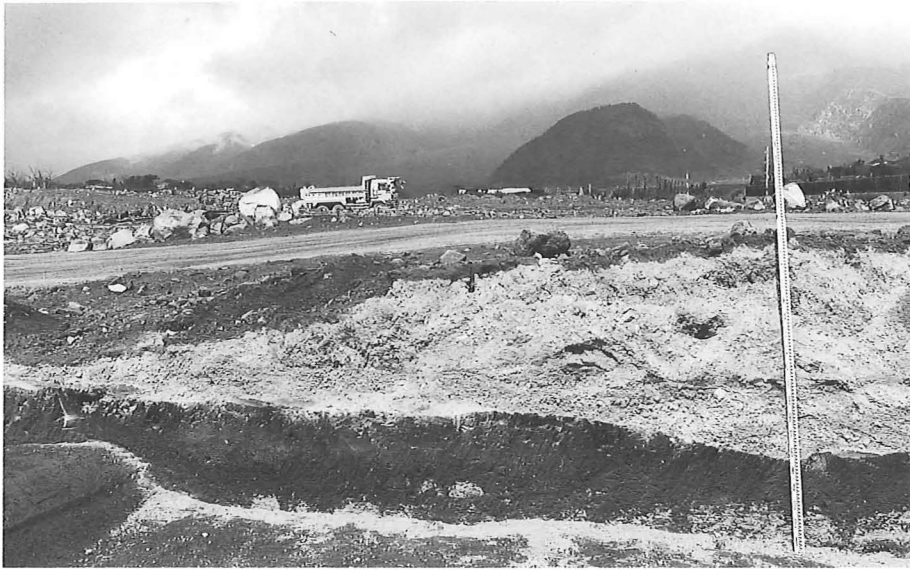


調査区より普賢岳を望む  
（東側から）



調査風景





1区 土層状況  
(西壁・南側)

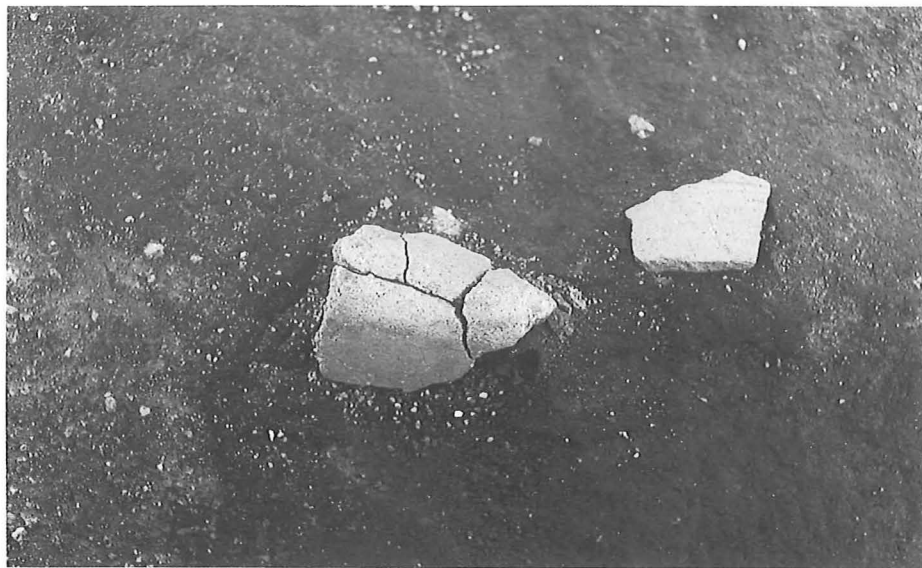


1区 土層状況  
(西壁・中央)

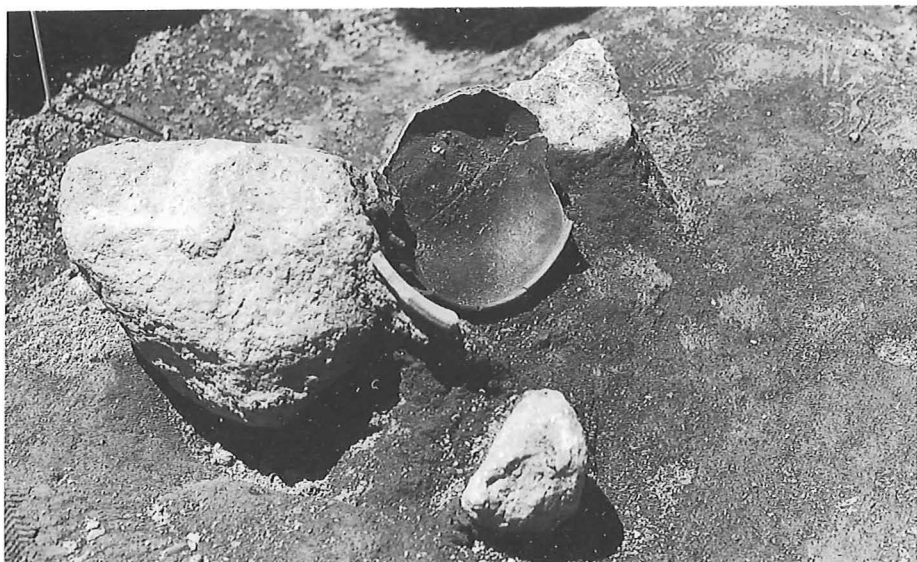


1区 土層状況  
(西壁・北側)

遺物出土状況（1区）



遺物出土状況（2区）

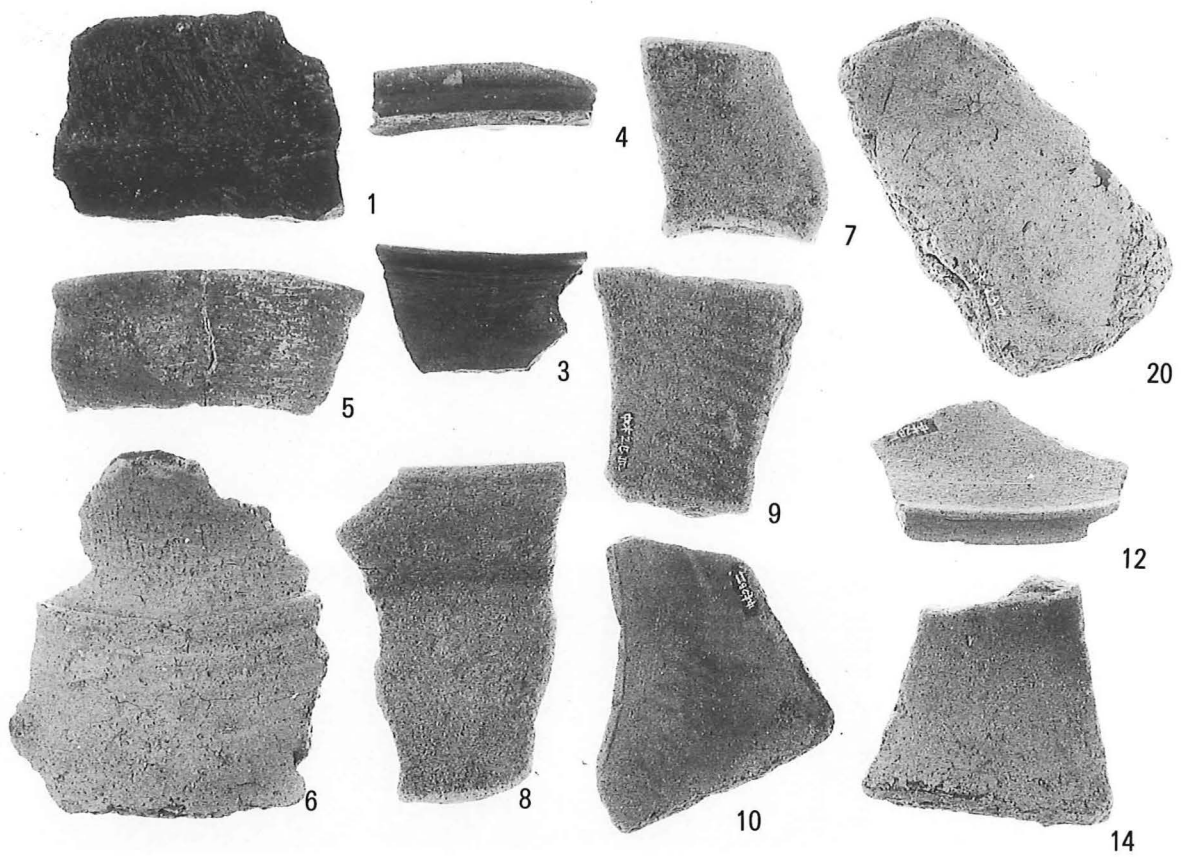


遺物出土状況（2区）

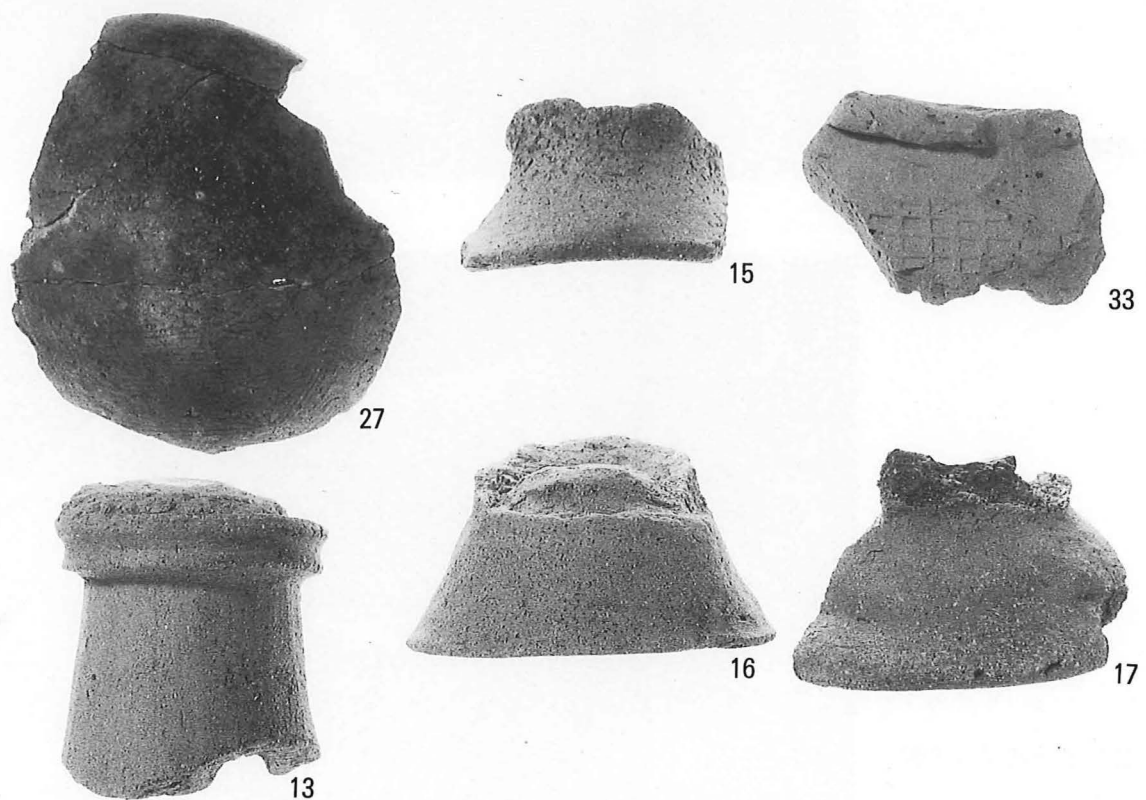


図版 3

土器①

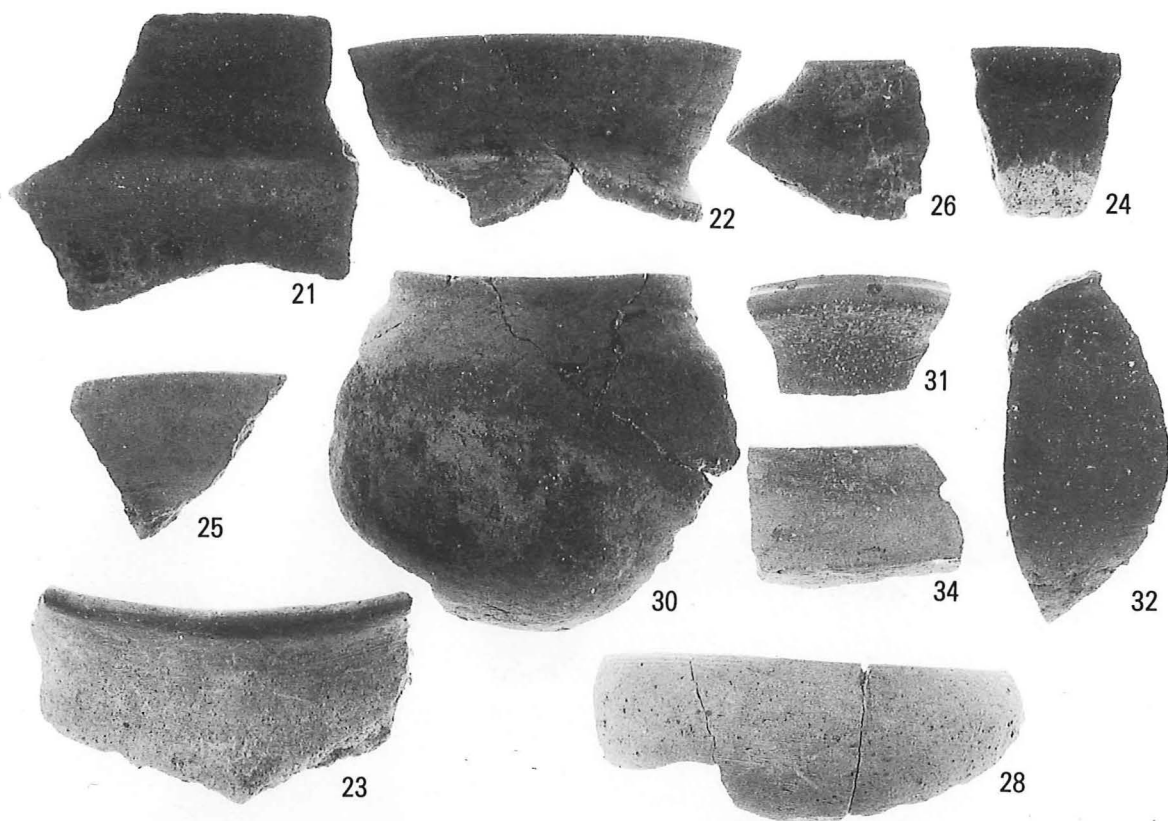


土器②

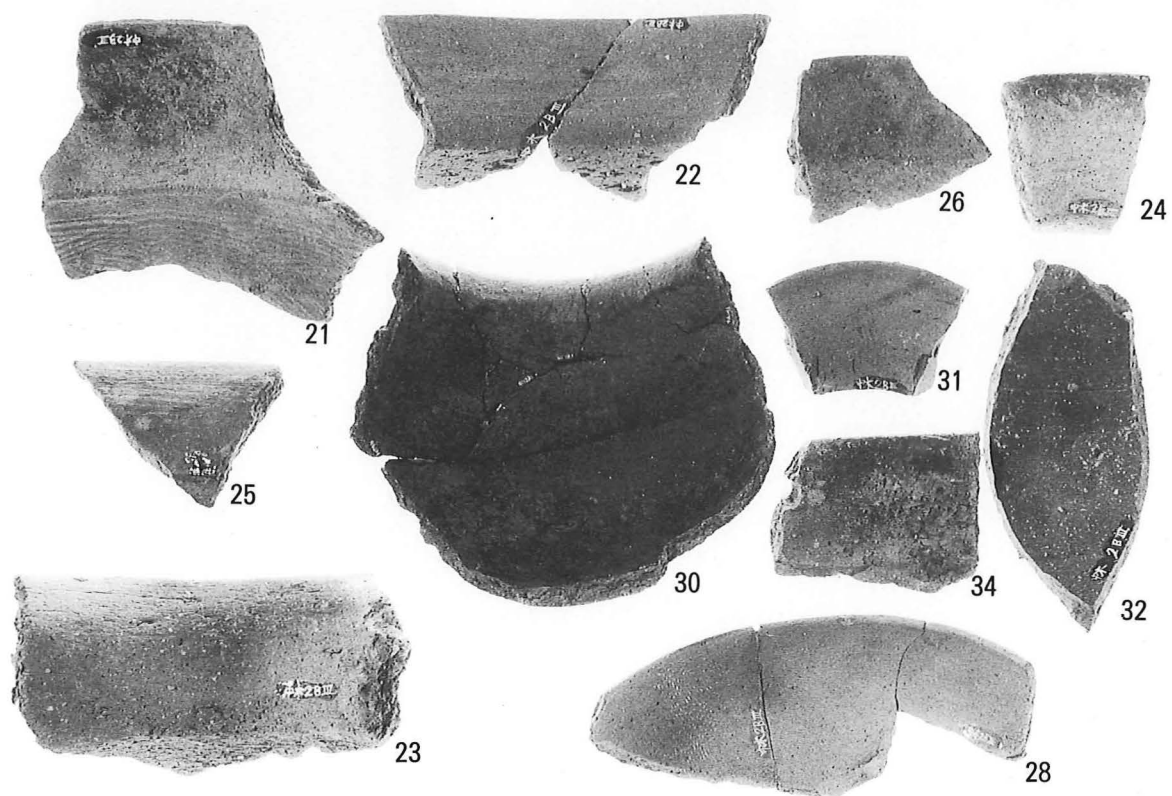


図版4 土器①・②

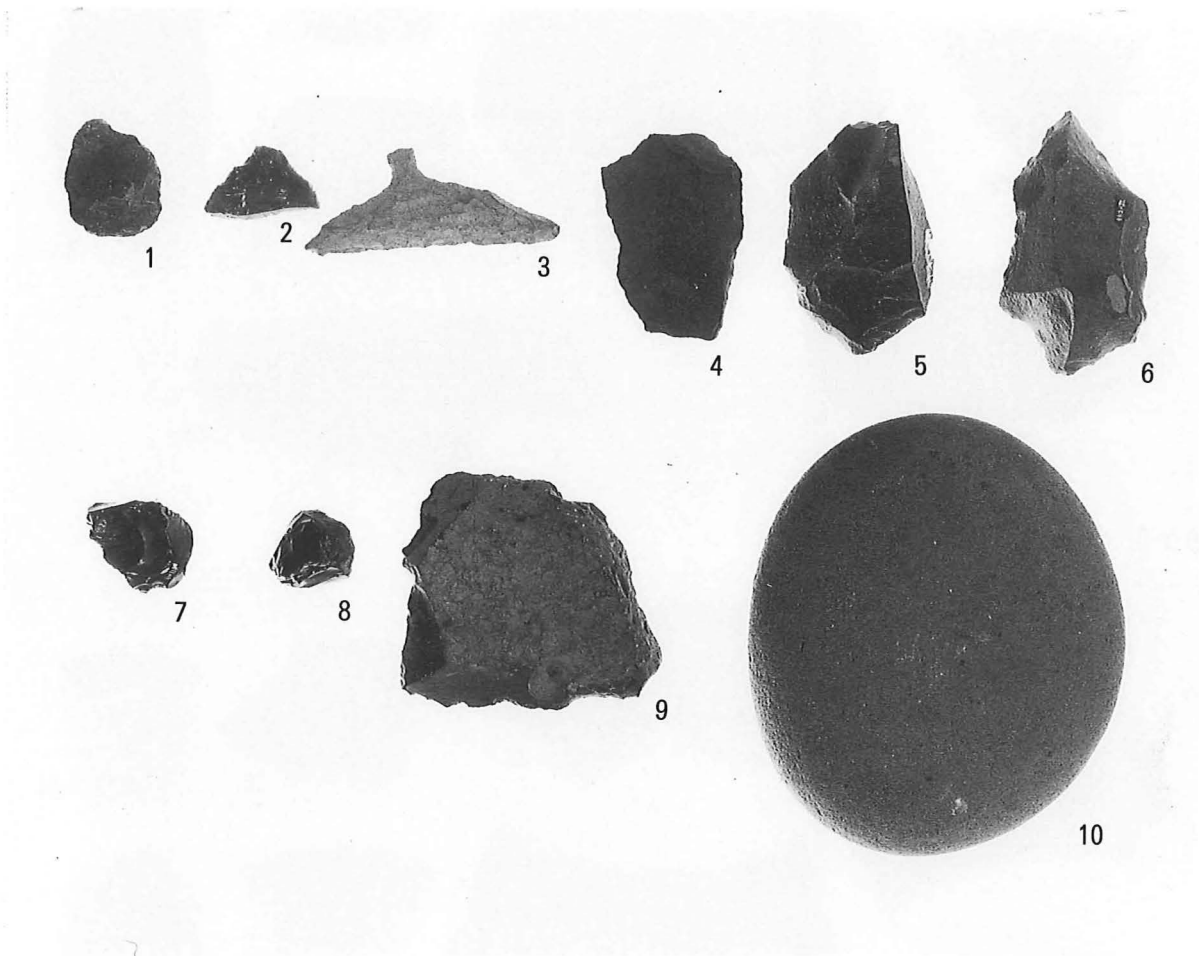
土器③オモテ



土器③ウラ



図版5 土器③



图版 6 石器①·② (1/2)

# 報 告 書 抄 録

| ふりがな             | なかこばいせき  |       |      |             |   |                           |                        |       |
|------------------|--|-------|------|-------------|---|---------------------------|------------------------|-------|
| 書名               | 中木場遺跡Ⅱ   |       |      |             |   |                           |                        |       |
| 副書名              | 水無川4号遊砂地造成工事に伴う工事立会調査報告書                                   |       |      |             |   |                           |                        |       |
| 巻次               | Ⅱ  |       |      |             |   |                           |                        |       |
| シリーズ名            | 長崎県文化財調査報告書  |       |      |             |   |                           |                        |       |
| シリーズ番号           | 第128集  |       |      |             |   |                           |                        |       |
| 編著書名             | 古門 雅高, 福田 一志, 甲斐田 彰  |       |      |             |   |                           |                        |       |
| 編集機関             | 長崎県教育委員会   |       |      |             |   |                           |                        |       |
| 所在地              | 〒850 長崎市江戸町2番13号   |       |      |             |   |                           |                        |       |
| 発行年月日            | 西暦 1996年3月30日  |       |      |             |   |                           |                        |       |
| ふりがな<br>所収遺跡名    | ふりがな<br>所在地  | コード   |      | 北緯<br>。 。 。 | 東経<br>。 。 。                               | 調査期間                      | 調査面積<br>m <sup>2</sup> | 調査原因  |
|                  |  | 市町村   | 遺跡番号 |             |   |                           |                        |       |
| なかこばいせき<br>中木場遺跡 | ながさきけんしまばらし<br>長崎県島原市<br>てんじんもとまち<br>天神元町<br>しらもとまち<br>白谷町 | 42203 | 3-58 | 32°44'85"   | 130°21'10"                                | 19950717<br>)<br>19950728 | 10,000                 | 遊砂地造成 |
| 所収遺跡名            | 種別   | 主な時代  | 主な遺構 |             | 主な遺物                                      |                           | 特記事項                   |       |
| なかこばいせき<br>中木場遺跡 | 遺物包含地  | 縄文～古墳 |      |             | 縄文土器<br>弥生土器<br>土師器<br>須恵器<br>中世陶磁器<br>石器 |                           |                        |       |

長崎県文化財調査報告書第128集

# 中木場遺跡Ⅱ

1996

発行 長崎県教育委員会  
長崎市江戸町2番13号

印刷 株式会社 チューエツ